

明清時期雲南省石屏盆地における 漢人移民の耕地開発

官による水利事業と科挙合格者の増加を中心として

Development of Farmland by Han Chinese Immigrants in the Shiping Basin
in Yunnan Province in the Ming and Qing Periods :
Focusing on Irrigation Projects by Government and the Increase
in the Number of Successful Applicants for Imperial Examination

西川和孝

NISHIKAWA Kazutaka

はじめに

- ① 漢人移民による水利事業
- ② 科挙合格者の増加と要因

結論

【論文要旨】

雲南への漢人移民の進出は、14世紀に明朝の版図に組み入れられたことに始まり、人口爆発に伴う大量の漢人移民の流入を迎えた18世紀末にそのピークに達する。従来、雲南の移民史において、雲南省外の他地域から移住してくる漢人移民の動向に焦点が集まりがちであり、省内の移民についてはほとんど省みられてこなかった。本稿では、石屏の事例を通して、こうした一方的な議論に対して別の見方を提示する。

石屏盆地では明代に屯田が設置されたことをきっかけに漢人移民が入植し、官主導による耕地開発が始まった。この際に官側は、(1)貯水池灌漑(2)水車利用による灌漑(3)囲田といった水利技術を活用し、治水工事と合わせて、耕地面積を拡大していった。その結果、石屏では人口増加が引き起こされ、他地域への移住へとつながる環境が整えられたのである。さらに官は、耕地開発で得た経済力を背景として人材の育成を目指し、教育施設の充実を図った。官主導の教育の普及と耕地開発の恩恵が民にも及んだことで、民間経営による私塾が登場し、優秀な人材を多数輩出するようになった。彼らは科挙に合格し、官吏として全国に散っていっただけでなく、教師としても周辺地域から招聘を受けた。そして、こうした人々が地縁を中心としたネットワークを構築することで移民活動の一助となった。すなわち、石屏盆地において、官の水利事業による耕地面積の拡大が、人口増大を可能にし、民が移住する社会的環境を作り上げたのである。

雲南の移民史を論じる上で、これまで指摘されてきたような他省からの移住という視点だけでなく、石屏盆地の事例の如く、雲南省内の耕地開発が発端となり、地元社会内部から移住へとつながる動きが生じてきたことにも目を向けるべきであろう。

【キーワード】 水田、水利、明清時代、雲南省、漢人移民